

ゴシック古典様式カテドラルの成立とその背景： Chartres, Reims, Amiens を中心として（下の一）

森, 洋

<https://doi.org/10.15017/2244519>

出版情報：史淵. 94, pp.1-32, 1965-03-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ゴテイツク古典様式カテドラルの成立とその背景

—— Chartes, Reims, Amiens を中心として —— (下の二)

森

洋

四、建設資金

古典様式カテドラル群を成立せしめた諸環境とカペー王権とを結ぶ諸関係の検討に入るに先立つて、我々は、これらのカテドラルを建設するに要した資金の出処について一瞥を加える必要がある。疑いもなく、天文学的な数字に達したに相違ないこれらの資金を、誰が、如何なる方法で調達したかを、一応決定することによつて、我々は、前章にのべた capitulum が、これらの建設において荷つたかもしれぬ役割をより具体的に知り得ると共に、推定される関係者グループのうち誰をインデックスとして、王権との関係を考察すべきかを決定する予備的作業ともなし得ると考えるからである。

前章までの諸考察がすでに明らかにしているように、他のあらゆるカテドラル建設関係の直接史料が極めて乏しいのと同様に、その経済関係の史料も、殆んど皆無に近い。唯一の例外は、Autun のカテドラル Saint-Lazare における十三世紀末の——恐らくは飛梁付加の——工事に際して、《provisieur》(provisor) Robert Clavel が、一二九四—一二九五會計年度について、capitulum に提出した収支報告書一通のみである⁽¹⁾。時期は大分ずれるが、Quicherat によつて分析された本報告の収入 (revenues) を一応表示し、それを手がかりにして我々は以下の考察を進めたいと思う。

	項 目	金 額
1.	Autun の capitulum に対する賦課金。	〔354£. 13 s. 2 d.〕
2.	都市及び教区内における空位 <i>bénéfices</i> からの収入で、教皇の許可により、当該カテドラルの工事にあてらるべきもの。	
3.	工事献金者 (<i>bienfaiteurs</i>) に認められた <i>indulgentia</i> の収入。	
4.	ペンテコステの <i>synode</i> に際しての募金 (<i>quête</i>) 及び <i>Saint-Lazare</i> の <i>confrérie</i> からの収入。	
5.	臨時収入(2)。	34£. 19 s. 5 d.
6.	工事特別会計のための募金箱からの収入(3)。	10£. 17 s. 2 d.
7.	Autun のカテドラルにおいて1294年のペンテコステから、1295年のペンテコステまでに鑄造された <i>deniers</i> から本会計にもたらされた予備控除額に対する附加項目。	42£. 13 s. 3 d.
最終項 (第7項) を除く合計		400£. 9 s. 9 d.

この表の数字中、与えられているものは第5〜第7項の金額と合計のみである。そして収入合計は第7項を除いて——この控除の理由は後で考察する——400£. 9s. 9d. であるから、第5、第6項の金額をこれから差し引いた数字が第1〜第4項に当たる。この収入に対して、計上している支出は290£. 2s. 8d. であるから、その差額110£. 7s. 1d. 及び、前表第7項目が説明されねばならず、事実その説明は、報告書前文に与えられているように思われる。

「二二九五年、ペンテコステノ八日間ノ大祝日後ノ金曜日ニ、clerc ニシテ、Saint-Lazare ノ Chapitre ノ provisionaire Robert Clavel ハ、上記 Chapitre ノ名ニオイテ二二九四年ペンテコステノ八日間ノ大祝日後ノ月曜日から、上記二二九五年ペンテコステノ八日間ノ大祝日中ノ主日マデニ、ナサレタル全費用（支出）ト収入ノ会計（compte）ヲ行ツタ。obole トシテ^(a) 12£. 11d. ノ控除ヲ行イ、^(b)「更ニ」當該支出ニアテラルベク受ケタ子納金（avances）ヲ忘レルコトナク控除スレバ、Autun ノ Chapitre ガ上記 Robert ニ対シテ負ウテイル 53£. 6s. 3d. ガ残り、^(c)「ソノ」額ハ、上記 Robert ガ、上記「二二九四年ペンテコステノ八日間ノ大祝日後ノ」月曜日ニナサレタ会計後ニ、Autun ノ Chapitre ニ対シテ負ウテイタモノデアル。」

以上のうち、「當該支出ニアテラルベク受ケタ子納金」とは、前表第7項に該当するものと考えられよう。最後の53£. 6s. 3d. は、前年度欠損額であり、一応 Robert が自費で補充していたものを、当年度収入から Chapitre が返済したものと考えられないであらうか。こうして全会計からの控除額は、12£. 11d. + 42£. 13s. 3d. + 53£. 6s. 3d. = 108£. 6d. となり、2£. 6s. 8d. の誤差をもつて、収支はバランスがとれることになる。

この前文から、工事費用がすべて司教座聖堂参事会の責任下におかれることが、十三世紀を通じて一般的な現象であつたと結論づけることは不可能である。何となれば、第一にこの会計報告は、カテドラル建設のそれではなく、部分補修、即ち維持工事のそれである。第二に、本会計は、唯一年度に關して「司教座聖堂参事会ノ名ニオイテ行ワレタ」収支のみに関して、同参事会が、参事会員外の、恐らくは計理専門家に委託して行わせたものである。⁽⁶⁾むしろ此処で注目せねばならぬのは、この例外的にバランスのとれた収支においても、尚収入の大部分である 354£. 13s. 2d. が、第1項から第4項までの収入に属していると云う事実であらう。

これら四項目の収入は、第5、第6項のそれと同様に、決して恒常的なものではない。そのことには、それらの項目

を、先ず von Simson が綿密に考察した Chartres の場合⁽⁷⁾と比較することによつて、多少の具体性を賦与し得るであろう。

一一九四年の火災後、率先して、又最も熱心に Chartres のカテドラルの再建を説いたのは、教皇使節であつたカルデアナル Melior de Pise であつた。彼は先ず司教 Renaud de Mougon と、彼が改革を終えたばかりの chapitre を説いて、司教と chanoines の収入の、生計費を除く大部分を、三年間その目的に献げると云う決議を行わせた。当時最も強力で富裕な Chapitre として令名の高かつた Chartres のその収入は、さしあたつて建設を開始するに充分であつたと思われるが、更にそれに加えて、空位 Bénéfices の収入を、数年間を限り、工事にむける決定も行われた模様である。⁽⁸⁾以上の如くして前表第1、第2項に該当する収入は、Chartres でも存在した訳であるが、その何れもが、三年間、或は数年間と時間を限られていた。従つて、これらが如何に巨額であろうとも、この収入のみが半世紀をこえる大工事のすべてをまかない得ぬことは言を俟たない。事実経済的危機は三年をすぎた頃におとずれ、その後は、前表第4項に該当する収入に、主として頼らねばならなかつたであろう。第3項の indulgentia の収入については、Chartres には確証がないが、この項目が第4項と區別し得るか否かについては問題が残るであろう。⁽⁹⁾

第4項の募金 (quête) に属する収入を得る方法は、大別して二つあつた。第一の方法は、Melior 自身が行つた如く、呼びかけによつて一時の、そして比較的大口の献金を得るか、或は「講」を作らせて、継続的な献金の予約、或は労働力の提供を行わしめる方法である。⁽¹⁰⁾この方法は、特に Chartres においては、その教会の特殊な地位の故に成功した。此処で「講」が如何なる成果を挙げ得たかは、すでに前(第二章)に述べた。各地から蝟進する巡礼者も亦、経済・労力の両面にわたつて、何らかを提供したであろう。それらにも増して、王以下の諸侯や、当時は富裕であつた Chartres の corporations が行つた献金が如何なるものであつたかを、今日残るガラス絵群が何よりも雄弁に物語つている。⁽¹¹⁾高窓列及び祭室部廻廊放射状祭室のガラス絵には、主としてそれぞれ聖俗諸侯が紋章 (blasons) やその姿を残している。⁽¹⁴⁾身廊部側廊

のガラス絵には、その他の部分と同様、それぞれ下部に、職業組合の活動を示す小図がはめこまれている。¹⁸⁾そして、それら両空間をつなぐ袖廊部の南北両バラ窓部は、南 (1217~1221作製) は王の一家に属する comte de Dreux, duc de Bretagne の Pierre Mauclerc の妻 Alix 及びその娘 Yolande がその姿をとどめ、¹⁹⁾北のそれ (1224~1236) は、フランス王 Saint-Louis の紋章 (Fleur de Lys) と母后にして摂政である Blanche de Castille の紋章(城)とをかかへてゐる。¹⁷⁾これらのガラス絵は、それぞれその紋章・人像や、職業活動図によつて示された諸侯又は組合の奉獻によつたのである。

第二の方法は聖遺物によるものである。この方法は、いわば最も古典的なものであり、例えば、一一二二年の Laon の聖遺物巡行団の例等が、これが十二世紀以前の最も一般的な募金法であつたことを暗示している。Chartes においては、「聖母の肌着」の令名は余りにも高く、これが巡礼者を絶えずひきつけていた事はすでに述べたが、一一九四年から三年間の司教及び司教座聖堂参事委員の献金が終つて財源に危機がおとずれた際に、参事委員がまずとつた対策は、これの巡行であつた。²⁰⁾更に Louis, comte de Chartres は「Sainte Anne の頭」を購入して、これをカテドラルに送つたが、²¹⁾この聖遺物も亦、相当な収入源となつた事であろう。しかしこの最後の方法は、聖遺物そのものの真偽、奇蹟、或はそれに伴つて行く説教者等に関して、極めて問題が生じやすいものである。事実一二一五年の Lateran 公会議 (Concilium Lateranense IV. Generale) は、このことに関して、次の如き決定を下した。

「何者カガ諸聖人ノ遺物ヲ売り立テニ出シ、或ハソレヲ其処此処見セ物ニスルコトニヨツテ、余リニシバシバキリスト教ノ〔名譽ガ〕傷ツケラレテイルトコロカラ、慈今〔同様に不名譽ヲ〕蒙ラザランガタメニ、本命令 (decretum) ヲモツテ次ノ如ク定メル。古来ノ〔聖〕遺物ハ、決シテ聖遺物匣 (Cassa) 外ニ出サザルベク、売立テニ出サザルコト。而シテ新タニ発見サレタル〔聖遺物〕ハ、マズ Roma 教皇ノ權威ニヨツテ承認セラレタルニ非ザレバ、何人モ〔コレヲ〕公ケニ崇敬〔ハノ対象ト〕スベク試ミザルコト。

ヨツテ高位聖職者たち (prelati) ハソノ他ニモ、多クノ場所デ、オリニフレテ慣行サレタルガ如キ、空シイ嘘言ヤ、偽造文書ニアザムカレテ、〔聖遺物〕尊崇ノ件デ彼ヲノ教会ニ来ツタモノヲチヲ、許シテハナラナイ。又奉獻の募集者たち (elemosynarum quæstores) も、その説教の中で他をあなむくことにより、何らかの悪弊を及ぼすによつて、教皇又は教区司教の真正の書簡を提示せぬ限り、許可することを禁止する。又その際に、同上書簡にもらるべき〔内容〕については、一切〔教区〕民 (populus) に示すことは許されな⁽²¹⁾。」

この決定は明らかに聖遺物の巡行による募金法に致命傷を与えるものである。しかし一挙にこの方法を消滅させたとは考えられない。何となれば、*Decretalium Gregorii IX* がこの canon を収録した際に、前掲拙訳では片仮名で記した前半部を除去し、平仮名で記した後半部のみを、本 canon の後半部である *indulgentia* に関する決定と結びつけているからである。⁽²³⁾ 又このことは、恐らくは聖遺物による募金と、*indulgentia* によるそれとが、一二一五年頃には不可分に結びついて考えられていた事、或はその後聖遺物による方法が漸次その重要性を失つて行つた事等を示しているであろう。これらの推定は重要な意味をもつ。何となれば恐らくは同様の諸方法で資金を調達したであろう Reims や Amiens ⁽²⁴⁾ についでみれば、前者の工事開始は一二一一年、後者は一二二〇年であるからである。而して事実 Reims についで、*indulgentia* が紛争の種となつた。

Reims におけるこの種の問題が如何なるものであつたかを知る、最も明瞭な手がかりは、一二四六年四月に出された教皇 Innocentius IV の 《Constitutiones et decretum》 (《Romana ecclesia que》) ⁽²⁵⁾ の前文によつて提供される。この前文は、Varin によつて始めて復原されたものであるが、⁽²⁶⁾ その結果が *Liber Sextus Decretalium* に 10 canones を提供するにいたる、⁽²⁷⁾ Reims 大司教と Soissons や Châlons-sur-Marne 等の属司教たちとの紛争の経緯を記述しながら次のように述べている。

「更ニ Reims ノ教会ノ建設ノタメニアテラレル募金者 (questores) ニツイテモ、ソレヲ属司教ノ教区民 (subditi) ヲ、彼ラガ募金者ヲ妨害シタトカ、或ハ「彼ラニ」從アウト欲シナイトカ云イタテテ、彼ラノ officials ノ前ニ出頭スベク召喚スルコトニヨリ、「属司教ノ」権限 (potestas) ヲ損ネテイル。…：同上大司教ハ更ニ、重荷ニ重荷ヲ加エ、從順ノ聖徳ノ「名」ニオイテ、新タニソノ属司教タチニ次ノ如ク命ジタ。即チ彼「大司教」ノモトカラ上記工事ノタメニ派遣サレタ募金者ヲ誠実ニムカエイレテ、平和ナ期待ヲモツテ、「属司教ノ」教区民ニ、彼ラガ上記教会ノ件ヲノベルコトヲ許スヨウニ。又更ニツケ加エテ「属司教」自身マズ手ハジメニ、彼ニ神カラ与エラレタ財産カラ、同上教会建設工事ノタメニ、鷹揚ナル献金ヲ行ウコト。又彼「大司教」ノ告示ニテ命ゼラレタル所ト、同上属司教タチノ意図トヲ、カレラノ教区民タチニ行キワタラシメ、モツテ彼ラガ当該教会ノタメノ寄金者ノ講 (confreria benefactorum) ニ從イ、ソノ講中 (confratri) ハ各自ソノ財産能力ニ応ジテ、毎年「一度」一定額ノ金銭又ハ收獲物ヲモツテ、同上教会ヲ訪レル「ヨウニスル」コト。更ニ同上募金者ノ到着ニ際シテハ、「タトエソレガ」平日「デアロウト、一日ヲ」正式ニ指定シテ (feris indictis solemnibus) 祝祭ヲ行ナイ、且コレヲ募金者ノ前ニ呼び集メラレタ上記教区民ハ、主日ニオケルガ如クニ、彼ヲ(募金者)カラ許可ヲ得「ザル」限り、労働セント試ミザランコトヲ。又上記教会ノ使者 (nunci) 募金者) ハ他ノ募金者ニ優先セシメラルベク、彼ラガ受イレラレタル週間ニハ、如何ナル他ノ使者ヲモ許可セザルコト。彼「大司教」ハ更ニソノ provincia ヲ通ジテ、同上建設ニ寄与シタモノ (benefactores) ニ、一年間ノ贖宥 (indulgentia) ヲ与エ、総公会議ノ決定 (statuta concilii generalis) ヲコエテ、ソノ上誓願違反ヤ、肉親ヘノ攻撃ノ罪アルモノニモ、贖罪ノ赦シ (remissiones) ヲ与エタ。……」⁽²⁸⁾

以上の引用を、一部で行われているように、⁽²⁹⁾ Reims の provincia があげてそのカテドラル建設をたすけた事実を示すものと解釈することは不可能である。一見して明らかないように、この部分のみならず、この bulla の前文全体は、この時期

の Reims の大司教や officialis、更にそれらの威をかりて横車をおす募金者たちに対する怨嗟の声に満ちている。内容上、上掲の引用文は二部分に分れている。即ち第一に募金者の目にあまる横行であり、その行為は、大司教と officialis の——裁判権に基づく——脅迫によつて裏づけされている。第二は大司教による indulgentia や remissiones の濫発であり、これも教会裁判による罪の宣告をまつて、始めて有効な手段たり得るものである。事実上掲の bulla は、Reims の provincia における、大司教と属司教との間の裁判権をめぐる諸問題の解決を目的としていたのである。⁽²³⁾

紛争の内容は、長文の前文中にも縷述されているが、これを別としても、Reims の諸裁判権がこの時期に如何なる行動をとつていたかは、Reims の Saint-Remi 修道院をめぐる一連の教皇文書から明らかになる。Innocentius IV は、一二四四年一月七日に Saint-Remi に対して「……我が先任者たちニヨツテ汝ラト汝ラノ修道院ニ対シテ賦与シタ indulgentiae や privilegia ノウチ、ソノアルモノノ行使ハ怠慢ノタメニ従来ハナオザリニサレテイタガ、……コレラ privilegia や indulgentia ガ、裁判(judicium)ヤ他ノ場所デ、自由ニ行使サレルコトヲ……認メル(indulgemus)……」と云う privilegia を与えた。これは、次にのべる一連の bullae に対する前提条件を確立したものである。即ち同年二月九日の privilegium は次の如く云う。

「……アル種ノ教会高位聖職者タチヤ、彼ラノ officiales ガ、俗件ニツイテ、ソノ裁判権(cognitio)ガ彼ラニデハナク、汝ラニ属シテイルコト明ラカデアル、汝ラノ修道院ノ homines ヲ、法的ニハ不可能ナルニヨツテ、最大限ニ〔既成〕事実〔ヲ作ルコト〕ニヨリ、汝ラノ權利ヲ侵害シテ裁カントシテイル。俗人ハ俗件ニツイテハ彼ラ〔俗人〕ノ面前ニオケルソノ裁判デ裁カレ、彼ラ〔高位聖職者ヤソノ officiales〕ニ裁判権ガ〔属シテイルト〕認メガタク、〔従ツテ〕上訴(appellationes)ヤソノ他正当ナ手段ニヨル例外〔ヨノゾケバ、〕彼ラ〔聖職者〕ノ吟味カラハ遠ザケラレテイルノヲ常トスルガ、彼ラハ彼〔俗人〕ニ、事前ニ欠席ノママ破門宣告(excommunicationis sententia)ヲ下ス。ソノ

解除ノタメニ、モシ〔ソノ俗人ガ〕富裕ナラバ、九リール・ニデナリウスヲ、他カラハ他ノ額ノ金銭ヲ、正義ニ反シテ、償イノ名目デ (emende nomine) ダマシトル。……⁽³²⁾

その二日後、二月十一日の *privilegium* も、同一内容を、更に激しい表現で繰返した。

「……アル種ノ教会高位聖職者タチ、更ニ彼ラノ *officiales* ハ、盲目的ナ貧欲ニ誘ワレテ、又ソノ吝嗇サニ節度ヲ加エズ、汝ラノ修道院ノ *homines* ヤ *mansionarii* カラダマシトル機会ヲモツタメニ、シバシバ彼ラヲ破門シ、マズ一定額ノ金銭ガ償イノ名目デ彼ラニ支払ワレヌ限り、ソウシタ宣告ヲ解除シヨウト欲シナイ。モシタママコレラ〔ノ宣告〕ヲ解除シタニシテモ、〔実状ハ〕程遠ク、同様ノ金銭ヲ支払ワネバ、ソレニツイテ旧イ慣習法 (*antiqua consuetudo*) ヲ主張シテ、同様ノ宣告ニ引キモドス。コレコソ真ニ腐敗ト云イ得ルデアロウ。……」⁽³³⁾

先に挙げた一月七日の *privilegium* も、一月九日、同十一日のそれも、何れもこうした侵害行為から *Saint-Remi* を守るための空しい措置であつた。更に二二四五年一月十八日の同修道院宛の *privilegium* は、事情が一向に変わつていない事を物語つてゐる。

「……汝ラノ修道院ノ *homines* ヤ *mansionarii*、或ハソノ他ノモノガ、汝ラノ法廷 (*forum*) ニ属シテイル〔ニモカカワラズ〕、汝ラヤ、汝ラノ *prepositus* ヤ *justicarii* ノ面前デ、越権ニヨリ、又〔*Reims* ノ〕教会法廷ニ属シテハイナイ正当ナ諸件ニヨリ、集メラレ、〔カレラヲ〕汝ラノ裁判カラ遠ザケ、裁判権 (*jurisdictio*) ヲ破壊センガタメニ、ソノ地ノ正規教会裁判官 (*judices ordinarii*) ノモトニ上訴スル〔コトヲ強イラレルガ如キ事態〕ガ、シバシバ生ジテイル。コレラノ上訴裁判権 (*appellaciones*) ハ、タトエ些事ニ〔関シテデ〕アロウトモ、無差別ニ同上修道院ノ権利ヲオカシテ、汝ラヤ、汝ラノ上記 *prepositi* ヤ *judicarii* ニ適用サレ、モシソノ上訴ニ対シテ汝ラガ反対ノ行動デモスレバ、コレラニ対シテ何等ノ裁判権ヲモ有スルトハ認めラレテイナイニモカカワラズ、ヒタスラ、真ニ腐敗ト呼バレ得ベキ慣習法

ヲ主張シテ、聖務禁止 (interdictum)、聖務停止 (suspensio)、或ハ破門 (excommunicatio) ノ宣告ヲ下ス。……」^[15]

これらの史料から、Reims の裁判権をめぐる、明瞭な像が浮かび上つてくる。即ち此処には「アル種ノ高位聖職者タチ (prelati) ト、ソノ officiales」及び「教会ノ正規裁判官」が登場する。彼らは、全 provincia を通じて、appellatio の名のもとに、俗人に対しても「些事」にいたるまで、事実上の第一審裁判権を行使し、しかも破門宣告を濫発し、それを阻止しようとした正当な裁判官に対しても同様な報復手段をとることを躊躇しない。これらの宣告をとくについては、「償イノ名目デ」金銭が強要される。そしてこれらすべての事柄は「旧イ慣習法」の名のもとに強行される。カテドラル建設のための募金者たちは、こうした背景のもとに活躍していたのである。

此処にいたれば、問題が、これら募金者そのものにあるのではなく、むしろ Reims の裁判権の構造、及びその行使法にあることは明らかである。一二四六年の《Romana ecclesia》の中心問題も、構造の面では、officialités であり、行使の面では、appellatio であること云えよう。excommunicatio 及びその「償イ」の問題は、それらの結果生じるものであつて、又この「償イ」とは、恐らくは indulgentia 又は remissio を指しているのであろう。そして Reims の大司教側は、その行使面での非難に次のような弁明を試みている。

「……Reims ノ〔大司教〕法廷 (curia remensis) ハ、法又ハ consuetudo ニヨツテ彼〔大司教〕ニ許サレタルガ如クニ、ソノ provincia 属司教ヤ archidiaconi ヤ他ノ高位聖職者タチノ投ゲガケル appellationes ヲ受ケテ、ソレヲ裁ク。カク〔appellationes ヲ〕受ケテ〔ソレヲ〕裁クコトハ、ソレニツイテ記憶ノ存シナイ時カラ、アタカモ所有セル〔権限〕ノ如クニ (in quasi possessione) 〔存シテキタ〕。カカル consuetudo ハ Reims 教会ニ特別ノモノデハナク、スベテノ Gallia ノ首都大司教ニ〔存シタモノデアル。〕……」

「……ソレヲ Reims 教会ノ officiales ガ、反対側ガ主張スルゴトク、募金者タチニ召喚ノ権限ヲ依託シタコトハナ

イ。Reims 教会ノ建設工事ノタメニ、神カラ授ケラレタ財物〔ノ一部〕ヲ喜捨シ、講ヲ作り、ソノ他同上工事が必要トスル消耗品ヲ分ツヨウニ、属司教ヤソノ教区民ニ命シ誘ナウコトハ、法ヤ平衡 (equitas) ニヨリ、或ハ同上教会ノ *consuetudo* ニヨツテ、彼〔大司教〕ニ許サレテイル。……」

「……更に Reims ノ *officiales* ハ、最モ重大ナ事件ニモ、最大ノ熟慮ヲ重ネ、心ニ多クノ悩ミヲヒメテ、ソノ属司教ノ聖務ヲ禁止シ、〔彼ヲ〕破門シ、又〔ソノ聖務ヲ〕停止シテイル。……」⁽³⁶⁾

以上を通観して二、三の事実が明らかになる。第一に直接建設資金の調達にかかわる事項、即ちそのための献金の要請、講の結成その他は、大司教のイニシアテイヴと責任において行われたと云う点について、両者の主張は一致している。第二に、大司教側の反論は一般論であつて、決して Saint-Remi 関係の諸教皇文書が述べているような、末端での諸活動諸結果を正当化してはいない。第三にこうした裁判制度上の混乱の原因が、十三世紀においては少なくとも制度として明瞭に把握出来なく、*officiales* によつて構成される *officialité* (*officialium*) なる存在にあつたであろう点に注目すべきである。*officialité* とは⁽³⁷⁾ 《*Romana ecclesia*》の *De appellatione* (VI decret. Irb. II. tit. XV. c. III) が与えた定義によれば、「一般ニ彼ラ (司教タチ) ノ法廷ニ属スル諸件ニツキ、彼ラ (司教タチ) ノ代理ヲツトメルコトニヨツテ〔コレヲ〕裁キ、一ツニシテ同体ノ補佐機官又ハ諮問機官〔ラソレゾレノ司教タチト形成シテイルモノ〕」⁽³⁷⁾である。従つて初期には司教の裁判権そのものの代行者であつて、それ自体の権限はない。Reims の場合、大司教自身のためにこれを組織したのは、Guillaume de Champagne であり、間もなく、同様のもを Reims の大小ニ *archidiaconi* が併せもつことになつた。これら *archidiaconi* の *officialités* 特に大 *archidiaconus* のそれは、ほぼ同 *provincia* の属司教のそれらと同等の地歩を占めていた。⁽³⁸⁾ Saint-Remi 関係の教皇文書に云う「アル種ノ教会高位聖職者トソノ *officiales*」とは、明らかに Reims の大司教と二 *archidiaconi* 及びそのそれぞれの *officiales* であつた。大司教の *curia* の周辺の三

officialites に加えて、その属司教たちのそれらが、明確な権限なしに、競合しあう時、其処に予想される混乱は、その責任を大司教側にのみ帰し得ぬ性格のものではなかつたであらう。これら officialites の権限の調整は、上記《Romana ecclesia》で、始めて明文化されたものであり、しかもそのみでは当事者を調停し得なかつたので、Albano の司教 Petrus を調停者にむかえ、その Sententia⁽⁴⁹⁾と更にそれに対する教皇の確認とをまつて、漸くこの係争を終結せしめた。

この間の事情は、此処では appellatio と excommunicatio の二点のみをとりあげ、《Romana ecclesia》とこれに対する《Sententia》の註解を一瞥するに止めたい。第一の appellatio に関つて、《Romana ecclesia》の De appellatione はかく云ふ。

「……Archidiaconus ヤ、コレヲ属司教ニ下屬スル他ノ〔ヨリ低イ〕高位聖職者ヤ、ソノ officiales カラハ、各自ノ属司教ニ上訴サルベキデアツテ、上記ノ属司教ヲハブイテ、〔直接〕同上(Reims)ノ法廷ニ上訴サルベキデハナイ。〔但シ〕以上ニツキ Reims 教会が consuetudo ニヨリ、権限ヲ有シテイルモノヲ除ク。」⁽⁴⁹⁾

この部分に関する Sententia の註解は、第一に、属司教の裁判権を第二審裁判、officiales 等のそれを第一審裁判とみなす点に特徴がある。⁽⁴³⁾第二にこの註解は、Reims 教会法廷に直接上訴し得る件とし得ない件とを詳述しながら、当然問題となり得る consuetudo の語を避けて、一種の法理論の色彩を与えようとしている。即ち、民事にしろ、刑事にしろ、結審に急を要するものは、直接最終審 (sententia definitiva) 即ち大司教法廷に上訴し得ない。しかし民事でも、「近親ノ故ノ婚姻解消」(de disjungendo matrimonio propter parentelam) と云つた、急を要しない件や、靈的な諸件は、直接「Reims ノ法廷ニ」(ad remensem curiam) 上訴し得る。但し中級審をとりこえる際には、何れの場合にも、「係争ガ紛糾シ、且偽証或ハ真実ヲ述べタロトニツイテノ宣誓ガナサレタ後」(post litis contestacionem, et juramentum de calumpnia sive de veritate dicenda prestitum) でなければならぬ。⁽⁴⁴⁾卑見によれば、この最後の条件は、宣誓の効力その

ものが問われるからであらう。しかしこの決定によつて、Reims 側がその provincia 中に、上訴を受けた形式をとつて、裁判権を侵透させる途はふさがれた。そしてこの制限は、Romana ecclesia の *De officio ordinarii* (VI decret. lib. I. tit. XVI, c. 1, et §. 1.) において、大司教が、その属司教たちの司教区内に、管外 *officiales* (*officiales foranei*) を設置する事を禁止する規定によつて裏づけられている。そして恐らくはその反対給付として、*Sententia* は、Reims 法廷の裁判権 (*jurisdictio curie reimensis*) を損なうが如き「新タナ中級審」(*nova media*) の設立を禁止した。⁽⁴⁵⁾

次に破門 (*excommunicatio*)、聖務停止 (*suspensio*)、聖務禁止 (*interdictus*) についで、Romana ecclesia は二ヶ所であつてゐる。第一は *De officio ordinarii* の末尾で、次の如く云う。

「Reims 大司教ノ *officiales* ハ、ソノ provincia 内デアロウト、乃至ハコレヲコエテ、ソノ属司教ニ対シテ、聖務禁止、聖務停止、將又破門ノ宣告ヲ下ソウト試ミルベキデハナイ。又コノコトハ、他ノ首都大司教ノ *officiales* ガソノ属司教ニ対シテモ同様ニ……遵守サルベク命ズル。」⁽⁴⁶⁾

更に *De sententia excommunicationis* (VI decret. lib. V. tit. XI. c. V.) は次の如く云ふ。

「*archidiaconi* ノ *officiales* ヤ、或ハソノ他何人デアロウトモ、Reims 教会ニ属シテ、属司教ノ裁判権ヲモツモノニヨツテ下サレタ聖務禁止、聖務停止、或ハ破門ノ宣告ハ、当該破門宣告者ヲノゾイテ、Reims 大司教ヤソノ *officiales* ガ解除シテハナラナイ。但シコノコトニツキ *consuetudo* ガモシアリトセバ、コレニ反シタ場合ヲ除ク。……」⁽⁴⁷⁾

後者のみについて *Sententia* は次の如き註解を付してゐる。

「……〔次ノ如ク〕述ベ且命ズル。同上ノ宣告ハ、〔再〕審サレタ上デ、ソノ件ヲ担当スベキ裁判権ニヨツテデナケレバ、解除シ、或ハ解除サルベク要求サレテハナラナイ。〕」⁽⁴⁸⁾

こうして、Reims 大司教にとつて、その破門宣告権及び解除権は、大司教の司教区にしか及ばなくなり、又その大小

archidiaconi のそれらとも抵触することになった。

先にのべた如く、これら一連の問題は、大司教周辺の裁判権濫用をめぐつて起つた。そしてその濫用は、管轄の侵犯に一原因があつた事は明らかであり、上述の諸決定は一応その問題を解決しようとした。但し大司教の *officiales* と大小 *archidiaconi* のそれとの調整は未だ充分には行われていない。次の問題は破門宣告の濫発と、その解除を口実とする金銭略取の問題であるが、これも亦、一応上記決定によつて途を閉ざされた。こうした一連の現象は、勿論教会裁判権整備過程の——そして殆んど奇蹟的に俗権裁判権の介入が見られない——一例とも見られるであろうが、特に Reims を選んでこれらの醜聞が生じたことは、カテドラル建設と全く無関係であつたとは考えられない。この点は、同じく *Romana ecclesia* の *De Penitentis et remissionibus* (VI decret. lib. V. tit. X. c. I.) が立証する。

「Reims ノ大司教ヤ、或ハソノ *officiales* (「ラシテ」、同上教会ノ属司教ノ教区民ヲ、Reims 教会建設ノタメノ募金者タチガ、彼ラ(教区民)ガ募金者タチニ抵抗スルトカ、従ウコトヲ欲シナイトカ云イタテテ、教区民ヲコノコトノ故ニ彼ラ(大司教或ハ *officiales*) ノ前ニ出頭スベク召喚セシメル権限ハ、彼ラ(募金者)ニ絶対ニ賦与サレテハイナイ。同上建設ノタメノ献金ノ受領ヤ補助ニ関シテハ、コレヲ属司教ヤ Reims ノ *Provincia* ノ他ノキリスト教信者タチヲ、愛 (*caritas*) ニヨツテコソ説得シ得ル。 *indulgentiae* ヲ賦与スル際ニモ、Reims 大司教ハ総公会議ノ決定ヲ越エテハナラナイ。」

かくて、裁判管轄侵犯、破門濫発、*indulgentia* は、少くとも Lyon 総公会議の当事者たちには、すべて募金的手段に結びつくものとして、同一次元でとらえられていたのである。

いわゆる *Indulgentia* は十字軍の時期にその従軍者に適用され、十二・十三世紀を通じて、次第にその教義、慣行を完成していった。⁽⁵⁾ 全贖宥 (*indulgentiae plenae*) は此処では問題にならないが、分贖宥 (*indulgentiae partiales*) についで、

教会堂建設に關係のある規定は、*Decretalium Gregorii IX* におちめられた *Alexander III* (1161—1175) の *bull* に見出される。

「汝 (*Archiepiscopus Cantuariensi*) が意見ヲ徴シ来リシ件、〔即チ〕教会ノ献堂〔ノ際〕ニ、或ハ橋ノ建設ニ合力セルモノニナサレタル *remissiones* ハ、^(a) *remissiones* ヲ与エルモノ (*remittentes*) ニ属スルモノ (教区民) 以外ニモ適用シ得ル〔ヤ否〕ヤノ件ニツキ、汝ガ以下ノコトヲ嚴ニ守ルコトヲ欲スル、即チ、当ノ裁判官ニヨリ結バレ或ハ解除セラレシコトノホカハ一切無効ナルニヨリ、上記 *remissiones* ヲ適用スル〔際〕ニハ、各自ノ裁判官 (判決者) ガ特ニ赦シヨ与エタ (*indulserunt*) モノ〔ナルヤ否ヤ〕ヲ判断シ、ソレヲモノニ〔ノミ〕適用スルコト也。」^(b)

此処では第一に、「教会献堂ノ際」の *remissiones* が認められていた事、しかし乍ら、第二にその適用は、罪の宣告を下した権威と同一の権威によつてのみ行われ得ると云う、原則が確立されている。「教会献堂」とは、その意味が必ずしも明らかではないが、その際に建設に関する功勞者への何等かの反対給付がその場で行われたと考えれば、当事者に相当自由な拡張解釈が可能になる。そして第二点は、*remissiones* 又は *indulgentiae* が募金者に手段として用いられることから生ずる濫用に対する予防策である。

先にかかげた——そして恐らくは *Romana ecclesia* が、「総公会議ノ決定」と呼んで典拠にした——一二一五年 *Lateralan* 公会議の決定は次の如く云う。

「……更ニ、献金ヲツノルベク派遣サレタモノハ、質素デ且慎シミ深クアルベク、幕舎ヤソノ他適ワシカラヌ場所ニ泊ラズ、又無用ノ或ハ過度ノ費エヲナサザルコト。〔又〕スベテニツキ信仰ヲ過マル〔ガゴトキ〕態度〔ヲモツテ〕振舞フヌヨウ、注意スベシ。

コレニ加エテ、教会高位聖職者ノアルモノガナスニ躊躇シナイ、*indulgentiae* ノ不謹慎〔ナ〕、過度〔ノ濫用〕ノ故

ニ、教会ノ鍵〔ノ権〕ハオカサレ、贖罪ノ痛悔ハ弱メラレテイル。〔ヨツテ〕我々ハ〔次ノヨウニ〕命ズル。即チ教会堂 (Basilica) ガ献ゲラレル際ニハ、ソレガ或ハ唯一ノ〔司教ニヨツテ献ゲラレヨウト〕、或ハ数人ノ司教ニヨツテ献ゲラレヨウト、 indulgentia ハ一年ヲ越エザルコト。更ニ又献堂記念日ニ際シテハ、許サレル remissio ハ、課サレル痛悔ノ四十日分ヲ越サザルコト。……」⁽⁸³⁾

我々は此処でこうした一般的な禁止或は制限規定の背後にある現象を復原することが出来る。即ち「教会又ハ聖処ノタメノ募金者」が実は「傭ワレタ勸説者」(predicatores mercenarii) であること。そして彼らが、無許可で、或は裁判権の管轄を越えて、「説教ヲシタリ、告解ヲ聞イタリ、痛悔ヲ課シタリ、〔ソノ他〕同種ノコトヲナシタリ」した。これらの記述は、一二三一年に Saint-Quentin で行われた Reims 教会の provincia の公会議決定における禁止の対象であることに注目を要する。⁽⁸⁴⁾ しかしこうした現象は、総公会議の決定でまず禁止されている所からしても、一大司教区のみ留まる現象だつた筈はない。事実一二四六年 Béziers の公会議の決定も、次のように述べている。

「……報酬目アテノ、又請負イノ募金者タチガ、或ハ彼ラ自身ノ悪イ生活ヤ、或ハ僅少ノ金錢ニヨツテ、地獄デ却罰サレテイルモノノ解放ヲ約束シタリスル、誤リニ満チタ説教ニヨツテ、多クノ醜聞ヲ惹キ起シテイルコトハタシカデア
ルカラ。」⁽⁸⁵⁾

こうした末端における濫用行為を抑制するための対策としては、かかる募金者たちに、教皇或は教区司教の書簡又は文書の携行を義務づけ、そしてそれらの文面に彼らに許された行動や説教内容を明記することが定められてはいた。⁽⁸⁶⁾ ただし、これらの行為が、裁判権、破門権、贖宥授与権をもつと同時に、これら募金者にその許可を与える権威それ自身によつて、暗黙裡に奨励されていたとすれば事態は全く別になる。

我々は Reims のカテドラル建設資金の出所について、Reims をめぐる上述のスキヤンダルが無関係ではなかつたので

はないか、その場合に怨嗟の的となつた *officialités* 当局者、即ち大司教と、大小 *archidiaconi* は、少なくともこの事意識的に奨励又は黙認していたのではないかと云う疑いをもつ。何となれば、この件が落着いて、こうした手をほぼ封じられた一二四八年から三年後の一二五一年三月六日の教皇書簡は、Reims 教会が、「耐エガタイ負債ヲ背負ツテ」いる事を報じ、その属司教たちに財政的援助を呼びかけているからである。⁽⁸⁷⁾

Reims の財政状態が、こうした非常手段にうつつたえねばならぬ程に悪化した原因は、単にカテドラル建設のためばかりではなかつた。例えば、Louis VIII, Louis IX 両王の戴冠式に際しての出費は、後述することくそれぞれ 4,000*f.* 以上であり、この額を、数年の間隔で支出せねばならなかつた事は大きな打撃であつたであろう。又一二三〇年代の大部分を、Reims 市民との係争関係にすごした（後述第五章）この教会は、Chartres におけるが如き多くの援助を、市民からカテドラル建設のために期待することは不可能だつたに違いない。何れにせよ、裁判、破門、贖宥の濫発で流入した金銭は、その相当部分が建設資金にまわされた可能性がある。

資金源がほほ以上の推定のようなものであつたとすれば、それらは何処を通つて建設現場へ投入されたであろうか。若しこれが *capitulum* の責任で行われていたとすれば、最も蓋然性のある収納支出の窓口は *thesaurarius* である。⁽⁸⁸⁾ しかし Reims の場合に、この *thesaurarius* は、一二二五年九月以後は、少なくともこの職責を果してはいなかつた。同年同月の協定書 (*carta compositionis*) は次の如く云う。

「……Reims 教会ハ、教会内デナサレルスベテノ奉獻ト献金トヲ、〔ソレラガ教会内〕ノ何処デ献ゲラレヨウトモ自由且完全ニ受取ルコト。又当該教会ニモタラサレルベキ *capitugia* ヤ、或ハ小教区司祭ガ、蠟燭ノタメニ納メ、モタラスベキ *denarius* ヤ *obolus* ヨモ⁽⁸⁹⁾〔自由且完全ニ受取ルコト〕。シカシテコノ故ニ、他〔デハソレゾレ〕ノ *thesaurarius* ガ行ツテイルガ如キ、照明ノタメノスベテノ必要出費ハ、当該教会ガ行ナウ。又教会ノ裝飾ヤ修復ノタメノ〔必要

出費)モ、当該教会ニヨツテ支出サレネバナラナイ。又ソノ他〔他教会デハ〕 subthesaurariノ手デ与エラレ(支出サレ)、或ハ入金サルベキ〔費目ニツイテモ同様デアル〕。但シ⁽⁵⁹⁾」

ここで云う「Reimsノ教会」とは、おそらくは capitulum を指しているのではなく、大司教の人格によつて代表される「教会」を指しているものと思われる。その際に、大司教及び archidiaconi の officialités による裁判関係収入は、如何に扱われていたであらうか。Romana ecclesia にも、一二四八年の裁定書にも、すでに述べた如く、Reims の officialités 相互間の管轄問題については、一言の言及もない。それらの間に競合関係がなかつたとは考えられないが、この問題の解決は、一二五四年を待たねばならなかつた。同年一月十六日は教皇の Constituciones は、始めて Reims の多元的な裁判権を整理しようとしたものである。⁽⁶⁰⁾ 裁判権そのものに関する諸項は後日にゆずるとして、此処では次の二点を指摘するに留める。即ち第一に、大司教と archidiaconi 及びそれぞれの officialités は、「全員ガソレゾレ各自ノ意志ニ基スク判断ニヨツテ、聖職者、俗人ヲ問ワズ、 civitas カラデモ又 Reims ノ archidiaconus 管区カラデアロウト〔欲スル人物ヲ〕、スベテノ且ソレゾレノ件ニツイテ、〔下級〕裁判官ニ選ブ権限ヲ有シテイルコト」⁽⁶¹⁾である。第二に「archidiaconus ハ oficiales ニツキ、或ハソレラノ法廷ノ〔罰金〕評価官^(a) (taxator) デアレ、罰金収納官 (receptor emendarum) デアレ、大司教ニ属スル聖職者タチノ前デ、罰金ニツイテモ、ソノ他ニツイテモ、同上大司教ノ全権利ヲ、善意ヲモツテ (bona fide) 尊重シ且守ルコトヲ誓イ、…又同様ニ、大司教ハソノ officialités ニツキ、ソノ法廷ノ罰金評価官デアレ罰金収納官デアレ、同上 archidiaconatus ノ諸権利ト諸収入ヲ保全スルコトヲ同ジク誓ウヨウニ約束スル」⁽⁶²⁾ことを規定している点である。これらは、Reims の三 officialités が、裁判権上も、財政権上も、その末端にいたるまで、単一系列上にそれぞれ独立するように配慮された事を物語っている。この教皇文書は、一二五〇年に教皇 Innocentius IV が、その甥 Ortofono を、大司教をして、Reims の大 archidiaconus の地位につけさせている所から、その甥の利害をまもるために発行されたも

のとも考えられる。しかし *taxator* や *receptor emendarum* といつた職は恐らくは相当にちかのぼつて各 *officialités* に附随していたものと想像される。そしてその際には、*Romana ecclesia* が弾該を加えた種類の収入は、末端から、それぞれの *officialité* を経て、直ちに大司教と大小 *archidiaconi* の手に入つた筈であるし、それがカテドラル建設資金に流れる場合には、大司教や大小 *archidiaconi* の手から、改めて献金の形をとつて投入されたものと想像する他はない。

我々は先に、十三世紀末の Autun 修復工事について、*capitulum* からその会計一切を請負つていたと思われる *provisor* の存在を確かめ得た。事実「修復工事」に関する限り、一般には *capitulum*、特に *thesaurarius* の権限で行われたらしい事を、前掲一二二五年の *Reims* の *thesaurarius* に関する協定書が暗示している。そしてこれをさへ、*Reims* の場合には *capitulum* の手を離れていた。教会堂新規建設工事に関して、その権限の所在は、どの史料も明らかにはしていない。たしかに、新カテドラルは、献堂式と同時に *capitulum* に引わたされているが(第一章)、この事実は、これまでの諸考察にてらしてみれば、維持の責任の引わたしと考えるべきで、*capitulum* そのものが、建設の全責任を負つていた事を意味してはいない。

建設工事の最終責任は、*Reims* の場合には少なくとも、こうして「*Reims* 教会」にあり、この教会は云うまでもなく大司教によつて代表される。これを他の司教やカテドラルに一般化する事には、慎重を要するであろうが、半面この一例があることは、*capitulum* に全責任を帰する事をも同時に妨げることになる。更に次の如き推定もあわせて結論に向かねばならない。即ちカテドラルは「神の家」(*Casa Dei*)であり、それ自体は原則的に永久性をもつべきものである。たまたま火災等によつてそれが破壊された場合、その再建、或はその様式の決定は、誰によつて決断されるべきであろうか。大司教・司教をおいて他にない。又その工事が終了すれば、永久にその姿であるべきカテドラルの——修復はともかく——建設工事のために、教会は新たに責任者を設置すべきであろうか。当然「神ノ恩寵ニヨツテ」その職にある大司教、

司教こそ、その栄をになうに最もふさわしいのではないだろうか。

以上の如くして我々は、建設工事の進行も、又それに先立つ新様式の決定も、大司教、司教の責任において果されたものと考える。そしてこの事は、我々が次章において王権との結びつきを考察せんとする場合に、その焦点をこれら大司教、司教に合わせる事を許すものである。

註

- (1) Quicherat, J., dans *Mélanges d'Archéologie et d'Histoire*, 2 vol., Paris, 1886, cité par Gimpel, *Les bâtisseurs*, p. 60.
 - (2) この項目は「工事会計が予期してつなかつた寄附(Bénéfices)を含む。例えば遺贈(Legs)であるが、Clunyの一人からの一例を除けば、何れもAutun司教区の住民からであり、更にそのうち一例(Magister Humbertus de Virgultis)を除けば、何れも農民のものである。その他 charrues の賃料の献金が三例記載されているが、5 s. 9 d. ; 14 s. ; 12 s. 2 d. と何れも少額である。(Gimpel, *loc. cit.*)
 - (3) Autun の主任司祭(curé)の家、その他個人宅、或は教区教会に、八ヶ所もつけられた募金箱(trons)の収入である。(Gimpel, *loc. cit.*)
 - (4) Quicherat が列挙した三十四費目の合計。細目は行論上不要であるが略す。(cf. Gimpel, *op. cit.*, pp. 60-63.)
 - (5) cité Gimpel, *op. cit.*, p. 59.
 - (6) 《obole》(obolus) は本来計量又は貨幣の小単位である。Du Cange, Niermeyer と同じくこれ以上の追究を行つては
- いが、なまたま一二一五年の Reims 大司教 Albericus の一文書 (Varin, *Arch. adm.*, 1-2, n° LXIII, p. 487.) に次の如き言及が見られる。
- 「…蠟燭[代](cera)ノタメニ、小教区ノ司祭タチガ「大司教座教会」ノ納メ且モタラサネバナラヌ denarius 一 obolus 一」(… et tam denarios quam obolos quos presbiteri parochiales solent reddere et afferre pro cera; …)
- 以上によつて、この obole とは、蠟燭代の名目、教区の——恐らくは——全収入に微細な比率でかかつて、一種の冥加金であつたと推定される。
- (9) 《provisieur》(provisor)なる名称は、中世におつて極めて多方面に用いられたが、(cf. Du Cange, *Glossarium*, v° 《PROVISOR》etc., t. VI, pp. 547-548; Niermeyer, *Mediae Latinitatis Lexicon Minus*, v° 《PROVISOR》, fasc. 10, p. 868.) Du Cange による Niermeyer と同じくこれをさして「教区ノ構成員であることを用例は見出せなす。むしろ Du Cange 《Provisores Ecclesiarum》の項に「これをさして「教会ノ財産ヲ所有シ管理シタ俗人」(nuntpati Laici, qui earum bona et possessiones administ-

rabani) との定義が与えられてゐる。その Robert が capitulum の一員であれば、その肩書は当然 clericus はなく、chanoine となければならぬ。従つて彼は、Autun の chapitre から工事会計事務を請負つてゐた俗人 clericus だと考えられる。

- (7) Simson, *Otto von, The Gothic Cathedral, the Origins of Gothic Architecture and the Medieval Concept of Order*, with an Appendix: *On the proportions of the South Tower of Chartres Cathedral*, by Ernst Levy, London, 1956, p. 159 et sq.

(8) *loc. cit.*, p. 176. この改革は、Guillaume de Champagne の司教当時に始められ、Renaud de Monçon にて完成された。改革の細目は不明であるが、恐らくは Guillaume de Champagne が Reims 大司教として行つたそれ(註章参照)に類似したものではなかつたであらうか。

(9) *loc. cit.*, p. 175; *Dictionnaire d'histoire et de géographie ecclésiastique*, t. XII, v. 《Chartres》, par G. Delaporte, col. 554. Chanoines の数は、十四世紀には七十七、役職者は十一、十一世紀以来十七を数えた。当時司教の年収は現行ドルに換算して \$1,500,000 と推定されているが (von Simson, *loc. cit.*, et n. 60.) Chanoines 全体の年収は、これを越えてゐたであらう。何となれば decanus のみの年収が \$700,000 を越えていたと推定されるからである。

- (10) Stein, *op. cit.*, p. 37.

ゴシック古典様式カテドラルの成立とその背景(森)

(11) von Simson, *op. cit.*, p. 172 et notes 47 et 48. は、indulgentia の収入を、附加的な可能性として推定する。indulgentia が慣行されるにいたるものは、正に十三世紀の事であり、従つて工事の後期にいたる程その可能性をますことは疑い得ないが、Chartres にては、依るべき史料がなく。von Simson は、一二七一年の Lyon 公会議にならば、Regensburg 司教が努力して、そのカテドラル建設の爲の献金者に、indulgentia を認める決定をとりしめたこと云う事実のみ援用するが、Concilium Lugdunense II Generale が開かれたのは一二七四年であり、その canones 中には少なくともかかる決定を見出し得ない。(Mansi, *Sacrorum Conciliorum nova et amplissima Collectio*, t. 24, Concilium Lugdunense II. Generale a Gregorio papa X celebratum, Additio, pars III, cap. VIII et IX, col. 131-132.) しかつ他方 Melior de Pise が、一般に對しては、Chartres の工事の参加が、靈的なむづろのある一種の poenitentia であると説いて、事実上の indulgentia を利用した事は、von Simson が云う如く、大いにあり得る事ではあるが、そのみならば、その収入はむしろ第4項の募金として取扱われるべきであらう。制度としての indulgentia については後述する。

- (12) von Simson, *op. cit.*, pp. 163 et sq., 177. 拙稿第二章参照。

(13) ガラス絵のイコノグラフィックな記述は、差当つて、Houvet, *Monographie de la cathédrale de Chartres*, (Extrait d'un

ouvrage couronné par l'Académie française), Chartres, 1924, pp. 69. sq. に於てその他 Merlet, *op. cit.*, pp. 35. sq.; von Simson, *op. cit.*, pp. 180-182.

- ④ Houvet は南北袖廊を以て發せられたすべしとの説に、nos 1-176. の一連番号を、西正面北側から、南にまわり、身廊部側廊(南)・袖廊(南)・祭室部側廊(南)・放射状祭室・祭室部側廊(北)・袖廊(北)・身廊部側廊(北)・このほぼ同一順序で高窓にかけた。祭室部側廊及び放射状祭室の番号は、從つて nos 13-55. (身廊部側廊は、nos 4-9. (南) nos 59-64. (北) 袖廊側廊は nos 10-12. (南) nos 56-58. による。高窓列にこのつは、祭室部(南から北へ) nos 105-135, 身廊部 nos 65-85. (南) nos 155-176, 袖廊部 nos 86-104. (南) nos 136-154. (北) 及びこの發せられたべき並び A-E, 西正面 nos 1-3, 176. にたつてゐる。以上のうち、袖廊を以て發せられた、聖俗諸侯の奉獻と判明してゐるものを著したる次の表に記す。
- no 26. (Marguerite de Lèves, Hugues de Meslay et Guérin de Friaize); no 28. (?) ; no 35. (Chanoine Henri Noblet); no 40. (un ecclésiastique); no 53. (Etiennne Chardonel et sa famille); no 54. (Geoffroy Chardonel); no 58. (?) ; no 74. (?) ; nos 93, 94. (Pierre Mauclet, comte de Dreux et duc de Bretagne); no 99. (?) ; no 100 (un ecclésiastique); no 106. (Bouchard de Marly); no 107. (la famille de Beaumont); no 110. (la famille de Courtenay); no 112. (un chanoine diacre); nos 113, 116.

(la maison de Montfort); no 126. (Louis VIII); nos 127, 128. (?) ; no 129. (Thibault VI, comte de Champagne); no 132. (un roi de Castille); no 133. (Robert de Bérou); no 134. (un seigneur de la famille de Renaud de Mouçon); no 137. (un chevalier); no 140. (un prêtre); no 141. (un prêtre); no 145. (Saint Louis et Blanche de Castille); no 154. (Philippe Hurepel); no 157. (2 donateurs). 以上の如くして、これら聖俗諸侯の奉獻は、身廊部・祭室部との高窓に集中してゐる。

- ⑤ Houvet, *loc. cit.* 同様に發せられた番号は、例すれば、no 4. (les armuriers); no 5. (les porteurs d'eau); no 6. (les cordonniers); no 13. (les marchands de comestibles); no 24. (un donateur, cordonier ou corroyeur); no 25. (les tanneurs); no 30 (les maçons); no 34. (les boulangers); no 37. (les marchands de fourrures et drapiers); no 38. (les marchands de fourrures); no 39. (les tisserands); no 41. (les cordonniers); no 42. (les maçons, tailleurs de pierre etc.); no 43. (les tisserands etc.); no 45. (les charpentiers, les menuisiers, les charrons et les tonneliers); no 59. (les maréchaux); no 60. (les épiciers, les merciers, les apothicaires); no 61. (les changeurs); no 62. (les drapiers); no 63. (les marchands de vin); no 64. (les charrons et les tonneliers); no 68. (les boulangers, les pâtisseries); no 69. (les boulangers); no 77. (les tourneurs);

以前の *texte* は、何れもこの長し *préambule* の存在を知らなかつた。Varin はこれを Bibliothèque Royale (即ち Bibliothèque Nationale), ms. lat. n^o 5210. 中に発見してこの名を付けたものとせらる。以上の来歴からして、本史料の性格を確かめることは困難せらる。Varin 自身は、Reims 大司教とその屬司教たちとの間の紛争が、總公会議のために Lyon に滞在してゐた教皇 Innocentius IV の手記に提出され、其処づけられた *Sententia* とすべしとせらるべしと (*loc. cit.*)。Pothast は、Paris 大司教の *magistri* 宛の宗義問題に関する指示書とすべしとせらるべしと (Pothast, *loc. cit.*)。何れにせよ、前文を綴る本文は、Lugdunense I. Generale Concilium (a^o 1245) の *canones* とすべしとす。cf. Mansi, *Ampliss. Coll.*, t. 23, col. 652 sq.

⑤ *De appellacionibus* (VI decret. lib. 2 tit. 15. c. 3.); *de officio ordinarii* (VI decret. lib. 1. tit. 16. c. 1.); *de foro competenti* (VI decret. lib. 2. tit. 2. c. 1.); *de poenitentia* (VI decret. lib. 5. tit. 9. c. 1.); *de sententia excommunicacionis* (VI decret. lib. 5. tit. 11. c. 5.); *de poenitentis et remissionibus* (VI decret. lib. 5. tit. 10. c. 1.); *de officio vicarii* (VI decret. lib. 1. tit. 13. c. 1.); *de supplicanda negligentia prelatorum* (VI decret. lib. 1. tit. 8. c. 1.); *de testibus* (VI decret. lib. 2. tit. 10. c. 3.); *de censuris et procuratoribus* (VI decret. lib. 3. tit. 20. c. 1.).

⑥ Varin, *loc. cit.*, p. 674. *Questorius* preterea qui pro

fabrica remensis ecclesie destinantur, citandi subditos eorumdem suffraganeorum quos iidem questores sibi resistere, aut nolle parere dixerint, ut coram officialibus eisdem compareant, consumunt (*sic*, concedunt?) potestatem; et taliter citandi coguntur coram eisdem officialibus respondere. Idem quoque archiepiscopus, gravamina gravaminibus addens, de novo eisdem suffraganeis, in virtute sancte obediencie, precepit ut, questores ab ipso pro eadem fabrica destinatos recipientes honeste, permitterent cum expectatione pacificae, eorum subtilius exprimere negotium ecclesie supradicte; injungens nichilominus ut a se ipsis incipientes, de bonis sibi a Deo collatis largas ad ejusdem fabrice opus elemosynas destinarent, ac ut sui denunciacione mandati, et ipsorum suffraganeorum monicionibus iidem inducerentur subditi, quod subeant benefactorum ejusdem ecclesie confrarias, et unusquisque confratrum juxta facultates proprias singulis annis ipsam visiteret ecclesiam in certa summa pecunie vel annona; necnon ut in ipsorum questorum adventum festum fieret, feris indictis solemnibus, et predicti subditi convocati non presumerant (*sic*), sicut nec (*sic*, in?) die dominica, presentibus eisdem questoribus, donec super hoc ab eis obtinerent licenciam, operari; ac nec (*sic*, ut?) ecclesie predicte nunciis ceteris questoribus preferrentur, nullis aliis infra ebdomadam in qua iidem recipiendi essent nunciis admitten-

dis. Concessit etiam per suam provinciam indulgentiam unius anni benefactoribus ejusdem fabricæ, statuta concilii generalis excedendo, faciens insuper remissiones super votorum transgressionibus, et offensis parentibus irrogatis. . . .

④ 聖ルヂ Demaison, *op. cit.*, p. 10.

⑤ 福註 聖ルヂ 中各雜質血染取也

⑥ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CXCLIII, p. 657; Cf. Pothast, *Regesta*, II, n° 11219. Innocentius. . . Cum sicut ex parte vestra fuit propositum coram nobis, nunnulle indulgentie ac privilegia vobis et monasterio vestro a predecessoribus nostris sunt concessa, quorum aliquibus uti per negligentiam hactenus omisistis, nos vestris supplicationibus inclinati, ut eisdem privilegiis ac indulgentiis in judiciis et aliis locis uti libere, prout expedire videritis, valeatis, alicujus lapsu temporis non obstante. . . . indulgentis; ita tamen quod nullum per hoc, illis qui contra vos super hiis legitime prescripserunt, prejudicium generetur. . . .

⑦ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CXCLIV, p. 658; Cf. Pothast, *Regesta*, II, n° 11250. Innocentius. . . dilectis filiis abbati et conventui monasterii S. Remigii remensis. Cum, sicut ex parte vestra fuit propositum coram nobis, nonnulli ecclesiarum prelati et officiales eorum, de causis laicorum hominum monasterii vestri quarum cognitio non ad eos, sed ad vos, dinoscitur pertinere, pro eo maxime de facto cum

de jure non possint, cognoscere in vestrum prejudicium moliantur; quod si conventus coram eis laico, a laico, licet ad ipsos non spectet cognitio, fori sui exceptione proposita per appellationem vel alio legitimo modo, ab examine ipsorum recesserint (*sic*), ipsi protinus in eum tanquam in corruptam excommunicationis sententiam proferant; pro cuius relaxatione novem libras et unum denarium si sit dives, alias aliam certam pecunie summam, extorquent emende nomine, contra justitiam ab eodem;

⑧ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CXCVII, p. 659; Cf. Pothast, *Regesta*, II, n° 11254. Innocentius. . . Dilectis abbati et conventui monasterii S. Remigii remensis. . . Ex parte vestra fuit propositum coram nobis, quod nunnulli ecclesiarum prelati, ac eorum officiales, ceca cupiditate seducti, nec ponentes avaricie sue modum, ut ab hominibus et mansionariis vestri monasterii occasionem habeant extorquendi, ipsos interdum excommunicant, quandoque vero supponunt ecclesiastico interdicto, nec volunt hujusmodi sententias relaxare, nisi prius eis soluta quadam pecunie quantitate emende nomine; et si forte ipsas relaxent, illos in quos late fuerant, si non solvant hujusmodi pecuniam, in easdem reducant sententias, pretendentes antiquam super hoc consuetudinem, que dicti potest verius corruptela;

⑨ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CXCLIX, p. 660-661; Cf.

Pothast, *Regesta*, II, n° 11513. Cum sicut nobis exponere curavistis, sepe contingat homines et mansionarios vestri monasterii, vel alios ad forum vestrum spectantes, coram vobis, prepositus vel iudicariis vestris, pro ipsorum excessibus et ex causis legitimis non ad forum ecclesiasticum spectantibus, conveniri, ipsi ut vestrum declinent iudicium, et jurisdictionem elidant, ad iudices ecclesiasticos ordinarios locorum appellanti, quorum appellaciones licet frivolas indifferenter in ipsius monasterii prejudicium admittentes, in vos, prepositos, et iudicarios supradictos, si contra ipsos processeritis appellantes, licet super hiis nullam jurisdictionem habere noscantur, interdici, suspensionis et excommunicacionis ferunt sententias, solam consuetudinem que dici potest corruptela verius pretendentes;...

⑤ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCVI, p. 676-678.... Pro parte autem ejusdem archiepiscopi et contra propositum extitit: quod curia remensis, appellaciones ab officialibus suffraganeorum suorum, archidiaconis, aliisque prelatiis sue provincie interjectas ad ipsam, recipi, et cognosci de eis, prout jure vel consuetudine sibi licet, in quasi possessione recipiendi et cognoscendi taliter fuit a tempore a quo memoria non existit; nec est hujus consuetudo remensis ecclesie specialis, sed generalis per omnes metropoles gallicanas.... Neque idem officiales remensis ecclesie questoribus facultatem

tem ciandi tribuunt, sicut pars adversa proponit; suffraganeos autem suos eorumque subditos exortari et inducere, ut de bonis sibi a Deo collatis ad opus fabricae remensis ecclesie largiantur, confrerias faciant, et alia que ad consummacionem ipsius operis necessaria dignoscuntur, et de jure et equitate, ac ejusdem ecclesie consuetudine, sibi licet;... Officiales quoque remenses, cum maxima deliberacione, ac pro gravissima causa, non absque multa cordis amaritudine, suos interdum suffraganeos interdiciunt, excommunicant, et suspendunt;...

⑥ officialité de l'évêque Gaudemet, *op. cit.*, dans Lot-Favrier, *Histoire des Institutions*, t. III, p. 258 sq.; 普の Reims の歴史と文化の発展 O. Grandmottet, *Les officialités de Reims*, dans *Bulletin d'information de l'Institut de Recherche et d'Histoire des Textes*, n° 4, 1956, p. 77. sq.

⑦ Varin, *loc. cit.*, p. 680. snorumque officialium qui generaliter de causis ad ipsorum (episcoporum) forum pertinentibus, eorumdem vices supplendo cognoscunt, unum et idem consistorium sive auditorium (cum episcopis constitutis)....

⑧ Grandmottet, *loc. cit.* Reims の officiales は十二世紀後半にわたる得てその人数は最初から少なかった。これを一応制度化したのが Guillaume de Champagne の archidiaconi (archidiacones) は大小に分かれ、大の方は archidiacon-

nus Remensis' のシカテ archidiaconus ecclesie remensis 爲セ
 archidiaque de Champagne 之語也。リノシテ officialités
 之を以テ十二世紀末に、後之へテ大國の之を眞代へ、脚
 履代の之を兼ひぬ。

- ㊦ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCIX, p. 688-690. 19
 octobre 1246; Comprmisum inter archiepiscopum remensem
 ex una parte, et suessionensem, ambianensem, laudunensem,
 tornacensem, novimensem, attrabatensem episcopos, ex
 altera, de Petro) albanensi episcopo pro iudice suscipiendo,
 super articulis in quibus erat archiepiscopo remensi consu-
 do per sententiam apostolicam reservata.

- ㊧ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCXII, p. 694 sq. 23 jan-
 vier 1248; Sentencia Petri albanensis episcopi in causa que
 vertebatur inter archiepiscopum remensem et eius suffragane-
 os. (之レ Sententia 之語也)。

- ㊨ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCXV, p. 701-702. 1^{er}
 avril 1248; Privilegium D. Innocenci papa IV, sentencie P.
 albanensis episcopi confirmatorium. Cf. Pothast, *Regesta*,
 II, n° 12887, "Etsi vista sententia".

- ㊩ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCVI, p. 680. Ab archidiaconis
 vero, aliisque inferioribus prelati suffraganeis subiectis
 eisdem, et eorum officialibus, ad suffraganeos ipsos debet,
 et non ad eandem curiam, omisiss dictis suffraganeis, appel-
 lari; nisi aliud remensi ecclesie de consuetudine competat in

コテリック古典様式カテドラルの成立とその背景(森)

hac parte. ...

- ㊪ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCXII, p. 695. ... in hac parte
 dicimus et ordinamus, quod a predictis inferioribus non
 possit, omisso medio, ante diffinitivam sententiam aliquate-
 nus appellari; ...

……コノ部分ニオイヤ我タノ述入且定メル。即チ上記ノ級者ニ
 ニシテ、中間者ヲ排除シテ、最終宣告(最終審)ノ何事モ
 之ヲ語テ得ヌコト也。……」

- ㊫ *Ibidem*, p. 695-696.

- ㊬ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCVI, p. 681. Prohibemus quoque,
 ne remenses archiepiscopi in dyocesis suffraganeorum
 suorum foraneos officiales constituent; ... nisi aliud remen-
 sis curia, circa talium institutionem officialium de consuetu-
 dine optineat special. ...

「更ニ Reims 大司教ガ、ソノ屬司教ノ教区内ニ、foranei
 officiales ヲ設定スルコトヲ禁止スル。……Reims ノ法廷ガ、
 カカレ officialité ニ、特別ノ consuetudo ニヨリ制度(ノシテ)ノ
 獲得(ガヌ)限ベ。……」

- ㊭ Cf. *Ibidem*, n° CCXII, p. 697. ... dicimus et ordinamus,
 quod archiepiscopus, sive curia remensis, in dyocesis
 suffraganeorum, huius(modi) foraneos officiales non habe-
 ant, nec de cetero non constituent.

「コノ部ニオイヤ次ノ如ク述ベ且定メル。大司教、或ハ
 Reims ノ法廷ハ、屬司教ノ教区内ニ、別ニ定メザル限りハ、
 カカレ foranei officiales ヲ有ザルコト也。」

⑨ *Ibidem*, p. 697. Inhibemus autem ne nova media quam que haecenus solent esse, creantur vel fiant, vel eciam concessionis in quibus gradus fiant in fraudem et prejudicium jurisdictionis cure remensis, seu archiepiscopi memorati.

「……シカミナ從來モシカマリシガ如ク、 nova media ヲ創設シ、或ハ作ルコトヲ、或ハ更ニ Reims ノ法廷又ハ大司教〔ニ屬スルコトノ〕知悉サシタル Juridictio ニ損害モ与ヘ、又ソノ「権利」ニ損害ウガ如キ、審級ヲ作ル concessio ヨナスコトヲ禁ズル。」

⑩ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCVI, p. 682. Officiales autem remensis archiepiscopi, quando in sua provincia, vel circa illam exiterint (*sic*, exiterit?), in suffraganeos suos interdicti vel suspensionis, aut excommunicationis proferre sententias non attemptent. Et hoc idem ab officialibus aliorum metropolitanoorum, circa ipsorum suffraganeos, quibus ob reverentiam pontificalis officii deferri volumus in hac parte, precipimus observari.

⑪ *Ibidem*, p. 683-684. Ceterum interdicti, suspensionis, vel excommunicationis sententias latis ab officialibus archidiaconorum, seu quibuslibet aliis jurisdictionem habentibus suffraganeorum remensis ecclesie subditis, remensis archiepiscopus, (et ejus officiales), omnissis ipsis excommunicatoribus, non relaxent, salva tamen super hoc contraria consuetudine si quam habent……

⑫ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCXII, p. 699... dicimus et ordinamus quod nullo modo relaxent seu relaxari mandent hujus(modi) sententias, nisi prout jussum fuerit, et cum debita cause cognitione.

⑬ Varin, *loc. cit.*, n° CCVI, p. 684. Quæstoribus autem fabricæ remensis ecclesie, remensis archiepiscopus, sive ejus officiales citandi suffraganeorum ipsius ecclesie subditos, quos iidem (questores) sibi resistere, aut nolle parere dixerint, ut super hoc compareant coram ipsis, nequaquam tributam potestatem. Super benigna vero (ipsorum) receptione ac subventionem ipsi fabricæ faciendam, possunt eosdem suffraganeos, et alios Christi fideles remensis provincie caritative monere. In concedendis vero indulgentiis, non excedat remensis archiepiscopus statutum concilii generalis.

⑭ Indulgentiæ | 聖レドゥヴレ A. Vacant, E. Magnet, E. Amann, *Dictionnaire de Théologie Catholique*, VII-2, Paris, 1923, v° «*Indulgences*», par Et. Magnin, col. 1594 sq.

⑮ Decretalium D. Gregorii Papæ IX. Compilatio, lib. V. tit. XXXVIII. c. IV. (*Corpus iuris canonici*, éd. Friedberg, II, col. 885.); Cf. Jaffé-Wattenbach, *Regesta*, n° 12411: Quod autem consuluit, utrum remissiones, quæ fiunt in dedicationibus ecclesiarum aut conferentibus ad aedificationem pontium, aliis prosint, quam his, qui remitti-

tentibus subsunt, hoc volumus tam fraternitatem (firmiter) tenere, quod, quum a non suo iudice ligari nullus valeat vel absolvi, remissiones praedictas prodesse illis tantummodis arbitramur, quibus, ut prosint, proprii iudices specialiter indulserunt.

㊤ 教令に indulgentiae の語句が用ゐられたる remissiones といふ。(Magnin, *loc. cit.*)

㊦ Concilium Lateranense IV. Generale. sub Innocentio IV. summo pontifice. an. 1215. Mansi, *Ampless. coll. Concil.*, t. 22, col. 1050-1051. ... Qui autem ad quaerendas ellemosynas destinantur, modesti sint et discreti, nec in tabernis aut locis aliis incongruis hospitentur, nec inutiliter faciant aut sumptuosas expensas caventes omnino, ne falsae religionis habitum gesterent.

Ad haec, quia per indiscretas et superfluas indulgentias, quas quidam ecclesiarum praelati facere non verentur, et claves ecclesiae contemnuntur, et poenitentialis satisfactio enervatur: decernimus ut, cum dedicatur basilica, non extendatur indulgentia ultra annum, sive ab uno solo, sive a pluribus episcopis dedecetur: ac deinde in anniversario dedicationis tempore quadraginta dies de injunctis poenitentibus indulgia remissio non excedat. ... (…の部分は註㊦所掲の部分に續べ。)

Cf. Decret. Gregor. IX, lib. V. tit. XXXVIII. c. XIV.

「トキヤ」の古本様式カテドラルの成立とその背景(森)

㊧ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CXVIII, p. 553-555. ... Contra questores ecclesiarum pro ecclesiis et piis locis, statumus ut nulli predicatorum mercenarii admittantur; sed per solos sacerdotes ditorum locorum negocia fideliter exponantur. ...

Nulli autem predicatori, vel minori, seu religioso cuiilibet, detur licentia a prelati predicandi, confessiones audiendi, penitencias injungendi et similia faciendi; preterquam in civitate vel diocesi, in qua vel quibus sit conventus talium, et quod ejusdem conventus sit cui talia committuntur; dummodo sit conventus sibi talium religiosorum, alioquin assumi valeant alimunde, generalibus magistris vel prioribus dumtaxat exceptis, et magistris in theologica facultate.

㊨ Concilium Biterrense, an. 1246, c. V. Mansi, *Ampless. coll. Concil.*, t. 23, col. 693.

Cum certum sit per venales ac conductores quaestores, tum ex prava ipsorum vita, tum ex praedicatione erronea, multa scandalosa provenisse, damnatis in inferno liberatorem pro modica pecunia promittentes.

㊩ 前掲註㊦の史料。更に㊦所掲の canon の前半部に云へ。 「…募金者ハ、教皇陛下ノ特免状 (indulgentia) 又ハ教区司教ノ書面ニ記載サレナイナイ限り、教会ニテ populus ニ説教スルコトハ許サレナイ。又文書又ハ書付ヲ (cella = cellula = schedula) ナシニシテ教会ニ受容セラレナイ。又修道士、又ハ同

等ノ人物ヲマツテ、ソノ上長ノ証明書 (testimoniales litterae) ヲ
携行シテイナイ限り、他ノ〔場所〕ニモソノ(説教) ヲ許可サ
レナイ。】

Ad quorundam insolentiam reformandam, ne profectus
fidei retardetur praecipuus quod quaeitores non permitantur
in ecclesiis aliud populo praedicare, quam in indulgentiis
domini papae, et sui dioecesani literis continetur, nec carrel-
li vel cellulae recipiantur ab eisdem, nec ad hoc de cetero
aliquis admittatur, nisi frater fuerit, vel alia persona idonea,
maioris sui testimoniales litteras secum portans.

- ⑮ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCXXXIV, pp. 722-725.
Hic est quod cum remensis ecclesia importabili, sicut fertur,
prenatur onere debitorum, propter quod vestrum suffragium
est sibi plurimum opportunum,
cf. Pothast, *Regesta*, II, n°. 14225.

⑯ 前章註の参照。

- ⑰ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n°. LXIII, p. 487.
Noverrint universi quod contentio que inter dilectos filios
capitulum et A. thesaurarium remensis ecclesie, super obla-
tionibus et rebus aliis, vertebatur, de assensu et voluntate
utrius(que) partis, per amicabilem compositionem, pacifi-
cata est in hunc modum : quod ecclesia remensis libere et
integre percipiet omnes oblationes et elemosinas que in eccle-
sia fiunt, et ubicumque in ea offerentur, et capitula que

solent in eadem ecclesia afferri, et tam denarios quam obo-
los quos presbiteri parochiales solent reddere et afferre pro-
cera; et propter hoc faciet eadem ecclesia omnes sumptus
necessarios, quales hucusque alii fecerunt thesaurarii, ad
luminare, et eadem que circa ornatum et reparacionem
ecclesie solent expendi, et alia que per manum subthesaurarii
solent dari et procurari; excepto quod

本文書は大司教 Albericus の名で出された Reims の capitu-
lum 及 thesaurarius の協定書である。当事者について、文中
《ecclesia remensis》が、訳出したものに《Reims の教会》
を指すのか、或は《Reims の capitulum》を指すのか疑わし
い。しかし本訳は前者をとった。何となれば、十三世紀の
Reims の殆んど全文書中に、capitulum を指示するため
ecclesia を使った例がないし、又前章で指摘したように、この
両者が実質的に同一物として表象される可能性は、殆んど考え
られないからである。更に訳出したような収納支出の費目が
capitulum の権限に移ったと考えようとするれば、その際には、
thesaurarius を capitulum 外におかねばならぬが、これは前者
が後者だ。《Foy et Hommage》を訳出した Varin,
loc. cit., note 1.) 事実と符合しなご。これを《Reims の教
会》と訳出したのは、本文書をめぐってここに訳出した諸権限
が capitulum を離れて、恐らくは大司教自身に移った事実を
当事者双方が確認しあつたものとすれば、矛盾は生じなご。

⑱ 《capitulum》は、フジバタゴケの《chevage》では

なやべんていせ^ノ Niemeyer, *Lexicon minus*, v^o 《*capaticum*》, fasc. 2, p. 129. ち' 誰一^レ 《*capaticum* familie, censum videlicet quem solvunt super altare.》を掌^らべ^ル。》
れによれば、この *capitulum* は一種の「祭壇税」であらう。
諸祭壇の収入が、殆んど *capitulum* のものであつた事は、前章に再三のこした。

(9) 前註^⑧。

(C) 以下除外例が続く。例えは「主ノ降誕ノ日」「復活祭」ノ
ミナロモテ、その他ある種の大司教の *amiversaria* 等における
「cena」の(即ち *capitulum*) の一定額納入義務、
carpentarius の任免権、*thesaurarius* が *subthesaurarii* に支給
すべき俸給、裁判権(会堂内における)の全部又は一部。
Varin, *loc. cit.*, note 1.) 等々であり、この職も此処で名譽
職にコレら^ノ。

(8) Varin, *Arch. adm.*, I-2, n^o CCXLVIII, pp. 746-756.
Pothast, *Regesta*, II, n^o 15198. Cum super iurisdictione
circa multa et diversa, iuribus quam pluribus, et nonnullis
variis articulis, racione archidiaconatus ren. ansis questio inter
vos orta fuerit et agitata dicitur; et denum, presentibus
et consententibus vobis, questio eadem per quandam ordi-
nationem est apud sedem apostolicam terminata, sicut in
sequentibus continetur; nos igitur vestris supplicationibus inc-
linati, ordinationem eandem quam abvertimus et intellexi-
mus diligenter, gratam et ratam habentes, ipsam auctoritate

apostolica confirmamus, et presentis scripti patrocinio commu-
nimus; decernentes et precipientes eadem auctoritate, ut
hujusmodi ordinacio a vobis et omnibus successoribus vestris
perpetuis temporibus, immobiliter observetur. (p. 748.)

(10) *Ibidem*, p. 749. et quod omnes et singuli, tam clerici
quam laici, de civitate et archidiaconatu remensi, liberam
eligendi sibi, pro sue voluntatis arbitrio, in omnibus et
singulis causis, in iudices, vel archiepiscopum remensem aut
eius officialem, vel archidiaconum remensem seu officialem
ipsius, qui nunc sunt vel qui pro tempore fuerint, habeant
facultatem.

(11) *Ibidem*, p. 754. Officialis autem archidiaconi, aut taxator
et receptor emendarum curie ipsius, jurent in presencia duo-
rum clericorum archiepiscopi, quod omnia iura ipsius archi-
episcopi, tam de emendis, quam de aliis, bona fide serva-
bunt et custodiant, et de hiis computationem vel racionem
fideliter reddent vel facient archiepiscopo, quod in curia sua
iura ipsius archiepiscopi que tam de emendis, quam de aliis,
debet ibi recipere, ipsi archiepiscopo vel alii de mandato
ipsius reddet integre, sine aliqua diminutione, vel faciet sibi
reddi. Et eodem modo promittat archiepiscopus, et officialis
ac taxator et receptor emendarum curie sue jurent similiter,
de conservandis omnibus ipsius archidiaconatus iuribus et
reddendis.

⑭ 《Taxator》: Du Cange, *Glossarium*, t. VIII, p. 41, v°
《Taxator》. じ *Aestimato* の難がゆゑのべかへ記した。

⑮ Varin, *Arch. adm.*, I-2, n° CCXXX; (30 mai 1250),
p. 716-717; Pothast, *Regesta*, II, n° 13986. Epistola Innocentii Pape IV ad archiepiscopum remensem, qua mandat quatinus Otobono nepoti suo archidiaconatum remensem, cancellarie remensis loco conferat.

LES CATHEDRALES GOTHIQUES
CLASSIQUES AU XIII^e SIECLE
ET LEUR FOND SOCIAL

—Les cathédrales de Chartres, de Reims, et
d'Amiens—
(Troisième partie)

Hiroshi MORI

Nous pouvons nous demander maintenant comment on pouvait subvenir à toutes les dépenses nécessaires à l'exécution de l'oeuvre colossale des nouvelles cathédrales. D'après un compte de la cathédrale d'Autun (1294-1295), fait par un proviseur chargé du chapitre, les recettes principales pour la réparation de la cathédrale étaient procurées par des quêtes d'aumônes et des indulgences accordées aux bienfaiteurs. A Chartres, l'évêque et les chanoines ont, comme aumône, abandonné pour les frais de l'oeuvre, leurs revenus pour une durée de trois ans. Beaucoup d'autres aumônes, non seulement de la part du roi et des vassaux de France, mais aussi des bourgeois chartrains, étaient fournies, et les pèlerins venant à Chartres ne manquaient pas d'offrir aussi aux saintes reliques leurs offrandes.

Le Concile de Lateran en 1215 promulgua l'interdiction de la quête par la procession des reliques, une des sources principales des ressources ; on devait trouver une autre façon de quêtes, que la bulle du pape Innocent IV, donné à Lyon le 21 mars 1246, indique de la manière suivante :

Lorsque les envoyés de l'église de Reims se présentaient dans une ville, on célébrait une fête solennelle, et l'on suspendait tout travail. Les quêteurs exposaient le but de leur mission aux fidèles réunis, sollicitaient leurs offrandes ; et les invitaient à former des *confréries* dont chaque membre versait une somme annuelle au profit de la cathédrale ;

les bienfaiteurs, en retour, avaient droit à une indulgence.

Les suffragants rémois s'en plaignèrent d'ailleurs, à propos de leur archevêque abusant de son pouvoir pour se procurer les sommes nécessaires aux dépenses. Cette bulle «*Romana ecclesia*» se rapporte en effet aux conflits concernant les ressorts judiciaires entre les prélats de Reims et leurs officialités, d'une part, et les suffragants de la province, d'autre part. Ceux-ci ont accusé l'archevêque d'avoir nommé et envoyé les quêteurs qui forçaient les sujets des suffragants à venir à la réunion et à s'organiser en confréries, en les menaçant de les citer devant les officialités rémoises. Les prélats rémois avaient ainsi pénétré dans le ressort d'autrui, jeté arbitrairement les sentences d'excommunication, et «*extorqué*» de l'argent au nom de l'«*emendatio*». Les canons de la bulle réglèrent les rapports des ressorts ; les abus judiciaires s'arrêtèrent.

Etant donné que les finances de l'église de Reims étaient, en 1251, tombées dans une crise importante, nous pouvons supposer que les ressources procurées par ces moyens devaient sans doute être considérables. Les revenus judiciaires des officialités avaient été destinés aux prélats qui chargeaient les officiales, car, chacun de ceux-ci n'était responsable que de sa propre autorité, soit à l'archevêque, soit à chacun des deux archidiaques, grand et petit. La somme de ces revenus destinée aux dépenses de l'oeuvre de la cathédrale devait être versée au nom d'aumônes par la main d'une de ces autorités. Notons enfin que, depuis 1215, l'archevêque de Reims, avait lui-même monopolisé, en remplaçant le chanoine trésorier, le droit de recevoir toutes les aumônes et les offrandes.

Nous pourrions ainsi conclure qu'à Reims, et chez les autres cathédrales peut-être, ce n'était jamais le chapitre, mais les archevêques et les évêques qui étaient toujours responsables des finances de l'oeuvre de la nouvelle cathédrale.

(à suivre)